

---

# 朧月夜

DEN

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

朧月夜

### 【Nコード】

N1004D

### 【作者名】

DEN

### 【あらすじ】

肌暖かい春の夜。ほのかにかすんだ月が、下界をぼんやりと照らし出す。私は、その銀光を浴びながら、仄暗い砂利道をひとり行く。

肌暖かい春の夜。ほのかにかすんだ月が、下界をぼんやりと照らし出す。

私は、その銀光を浴びながら、仄暗い砂利道をひとり行く。

私がそこを通っても不思議と音は立たず、あたりは不気味な空気に包まれていた。

畔には、小さな小さな水路が、静かに静かに流れている。

耳を澄まさなければ、その存在さえも忘れられてしまうような、人工の川。

けれど、こんなちっぽけなものが私たちの生活を支える田園へと流れ込み、私たちを生かしてくれていたことを思うと、素直に感動してしまう。

今更だけど、本当に今更だけど、私はその健気さに感謝した。

さて。

鬱蒼と草木が生茂った、この田舎道は、彼の実家へと繋がっている。

私は、彼に逢うために、今日ここに来た。

でも、彼は、そんな事を望んでいないのかもしれない。

なぜなら、私達はちょうど一年前に別れたのだから。

そして。

彼は、おそらく私を忘れるために、実家へと帰ってきたのだから――

ふと、横を見ると、私の周りを二羽の蝶が舞っている。

それは、見たこともない、夜闇に溶け込んだ黒い色をしていた。

私が撫ぜようとして、その手を伸ばすと、漆黒の蝶は一羽、二羽と私の体をすり抜けるようにして、飛んでいってしまった。

不意に、私の胸に不安が芽生え、私は立ち止まる。

彼は、こんな私に逢って、くれるのだろうか……

私は、本当は此処にいてはいけない存在なのだ。

それは分かっている。

今こうしているのは、単なる私の、我儘で、エゴで、身勝手なのだ。

ただ——今日は、今の私が生まれた日。

だから。

せめて、今日だけは逢ってほしい。

私達は、気軽に逢うことも、話すことも、メールを交わすことも、出来ない。

けれど。

せめて、一目だけでも彼の姿をこの目に焼き付けたい。

強い願いが私をつき動かし、強い思いだけが私の背中を優しく押してくれる。

私は顔を上げて、また暗闇を進み出した。

しばらくすると、奥の奥にほんのりとした明かりが見える。

優しい金色の光に包まれたところに彼の家はあった。

古い木の質感が漂い、時代の流れを思わせるその造りは、付き合っていた頃、彼によく聞かされた家のイメージと見事に一致していた。彼はいつも、ボロイだの、汚いだの、口を尖らせて悪口ばかり言っていたけど、最後はいつも、「まあ、一緒に住むなら、あそこしかないんだけど、さ」と照れくさそうに笑っていた。

私は、その頃の自分達と照らし合わせながら、彼の家をじつくりと眺める。

すると、その頃の私が思い描いていたイメージが、何年も、何十年先までも呼び起された。

——彼の声、子供達の声、私の声がこだまするなかで、私達はいつも笑顔だった。

老朽化が進んだ家を、子供たちが走り回るせいで、床がぎしぎしと軋んでいる。

夏が近づいてくると、室内は異様なほど暑くなるので、私達は出来る限りの薄着になる。

秋になれば——

ガチャリ

誰かが扉を開ける音がして、私は現実引き戻された。

ドアの向こうから顔を覗かせたのは、彼ではなく、彼の母親だった。一度会ったことがあるだけだが、私はしっかりと彼女の快活で優しいような顔を覚えていた。

しかし、彼女はこちらに目を向けることもなく、扉を閉めた。

その無機質な音が、無慈悲に私の中を壊そうとする。

私が先に描いていた幻想は、形を帯びることなく消え失せ、この場

所において、私は自分が完全に部外者であることを思い知らされました。

でも、負ける訳にはいかない。

私は、玄関から入ることは躊躇ったが、変わりに彼の部屋の窓辺に立とうと思った。

顔を上げて、明かりの点いている部屋を闇雲に探し始める。

確証など無かった。

それでも、今の私には絶対に彼を見つけ出す自信があった。

すると、三つ並んだ部屋の内、一番小さな部屋の窓から、まばゆい蛍光灯の光が漏れ出しているのが目についた。

あそこだ。

私はそちらへゆっくりと近づいていき、そして、窓の外から室内の様子をこっそりと窺った。自分の鼓動が高鳴っているような、そんな懐かしい感覚に捉われながら、脳裏に刻まれた彼の姿を確認しようとする。

いた――

窓のすぐそばに置かれている机に向かって、彼はいた。

思わず声を漏らしそうになるほど近くに、彼はいた。

手を伸ばせば触れられるほど近くに、彼はいた。

一年前とほとんど変わらない姿で、彼はいた。

私がいつも傍に寄り添っていた彼のままで、彼はいた。

思い出は駆け廻る。いずれかは終局する今へと向かって。

それでも、私は笑顔になっている。昔も。今も。そう。彼の傍にいる私は――いつも笑顔なのだ。

私の胸が充足で溢れる気がした。

こうして望み通り彼に一目逢えたのだから、もう十分だろう。もう、帰ろう。

気がつくのと、涙を堪えて自分自身にそう言い聞かせていた。

窓に背を向け、立ち去ろうとしたとき。

明らかに。鮮やかに。艶やかに。清らかに。

朧げな月が煌きりめいた。

私は思わず立ち止まり、彼は思わず窓を開ける。

金色の光を浴び、天高い星よりも輝く私を見て、彼の口は私の名を刻んだ。

「理紗……」

私の声も彼の名を呼ぶ。

「……孝之」

私達はそれ以上何も言わず、ただ視線と視線を交わしていた。

でも、言葉が出てこなかったわけではない。

私と彼は、ただそれだけで通じ合っていたのだ。

二人の糸は鎖パスよりも強く繋がっていて、絆よりも固く結ばれている。

そう思い込んでいるのは私だけかもしれないし、どこにも根拠はないのだけれど、それでも、私はそう確信していた。

だから笑顔で彼に訊ねる。

「また、会いにきていいかな？」

彼もいつもの笑顔で言う。

「ああ、また、な」

彼の返事と笑顔を中心に留めて、私は彼に背を向ける。

そして――

銀色の月を見上げ、吸い込まれるようにして、私は消えた。

今日は今の私が生まれた日――私の命日だった。

一年前の今日、私と彼は死に別れ、私に未練を残さないために、彼はこうして実家へと戻ってきた。

そんな決意をしていた彼に逢いに行っていたのだろうか。

私の心は揺らいたが、結局、自分の気持ちに嘘はつけなかった。

こうして、朧月夜のなか、彼の実家へと続く砂利道を一人進んできってしまったのだ。

朧月夜のおぼろげな記憶。

朧月夜は、おぼろげな私の姿を写し出し、彼の記憶もおぼろげにしてくれる。



明日になれば、今日の出来事は彼にとって、夢のようなものになるのだろう。

たとえば、彼が忘れてしまうとしても、私は彼に逢えて嬉しかった。自分の我儘を貫き通したことを、反省してはいなかった。

彼には届かないかもしれないが、銀色の月に吸い込まれるようにして消える直前、私は彼にこう囁いた。

朧月夜にまた、ね――

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1004d/>

---

朧月夜

2011年1月28日15時22分発行